

令和6年度岡崎市教育研究大会レポート

1.

1 4 特別活動

岡崎市立北中学校 小川 実優

2. 研究テーマ

自分らしさを生かし、主体的・協働的に行動する生徒の育成 ～自他のよさを認め合う生徒会一人一活動の実践を通して～

3. 研究概要

(1) 主題設定の理由

令和3年度に文部科学省中央審議会から示された、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～では、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながらさまざまな社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。

中学校は、人間関係が広がり、社会の一員として自分の役割や責任の自覚が芽生えてくる時期である。また、さまざまな経験の中で自分の生き方を模索し、夢や理想をもち始める時期でもある。しかし、【資料1】にあるように、国立青少年教育振興機構が実施した「青少年の体験活動等に関する意識調査（令和元年度調査）」によると、「自分には、自分らしさがある」「今の自分が好きだ」の項目で、学年が上がるにつれて低くなっている。これらの調査からも、近年問題視されている日本の子どもたちの自己肯定感の低さが伺える。もちろん、本校生徒も例外ではない。

【資料1】青少年の体験活動等に関する意識調査（令和元年度調査）

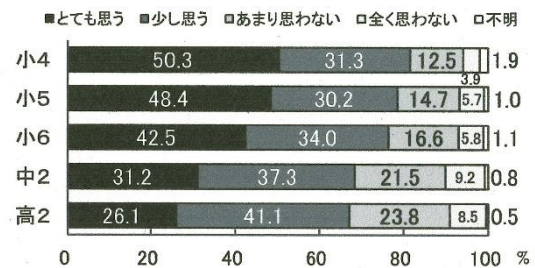


図 3-1-205 自分には、自分らしさがある

そこで、生徒たちが自らの役割を認識し、自他の価値やよさを認め合うことができるようになってほしいという願いから、研究主題を『自分らしさを生かし、主体的・協働的に行動する生徒の育成』とし、生徒会一人一活動の実践を進めることにした。

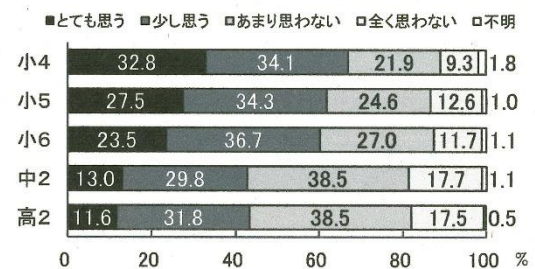


図 3-1-206 今の自分が好きだ

(2) 目指す生徒像

一人一活動の生徒会活動の中で、それぞれの資質や能力に応じて自分の役割を認識することで、自他の価値やよさを認め合える生徒

(3) 研究の仮説と手だて

仮説① 学校活動としての委員会や係活動に加え、行事ごとの実行委員を全員に任せることで、自分の役割を認識し、生徒一人ひとりが活躍する場を見つけることができる。

〈手だて〉

- ①各種学校・生徒会行事で一人一活動を行うことで誰ひとり取り残すことなく、参加できるようにする。
- ②生徒の実態や前年度の反省をもとに、教師と生徒会役員で実行委員の人数や活動の精選を行うことで、生徒が成功体験を得る機会を多くもてるようにする。

仮説② 生徒が自分の得意なことを生かし、生徒会活動を行うことで、自他の価値やよさを認め合い、自己有用感を育むことができる。

〈手だて〉

- ①生徒会一人一活動の企画、運営の工夫（役割や運営方法の見直し、改善）を行う。
- ②生徒の得意分野を生かせる行事運営を行う。

4. 実践

(1) 全員が実行委員となることで、自分の役割を認識し、生徒一人ひとりが活躍する場を見つけることができる。(仮説①の実践)

①一人一活動（以下、KITA プロダクション）を行うことで誰ひとり取り残すことなく、参加できるようにする。

昨年度、学年ごとの行事（1年生は体育大会リーダー、2年生は体育大会リーダー、スキー学習実行委員、3年生は体育大会リーダー、新人戦応援団）として手を挙げたのは、それぞれ学年の3分の1程度の人数である。特別活動の学校行事の重点目標にもある「集団への所属感を深める体験的な活動の展開」は、各学年での活動における自由参加制度では不十分な状態にある。生徒が学校の中で帰属意識をもち、自分の居場所をもてるようにするための方策として、一人ひとりの生徒が何かしらの役割をもつことは、重要であると考える。

しかし一方で、活動内容や時期によっては生徒が達成感を十分に得られていないものもあった。【資料2】は年度末に教員から意見をもらった、KITA プロダクションへの反省を抜粋したものである。

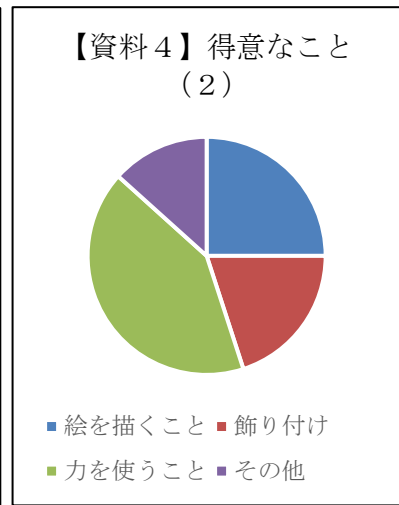
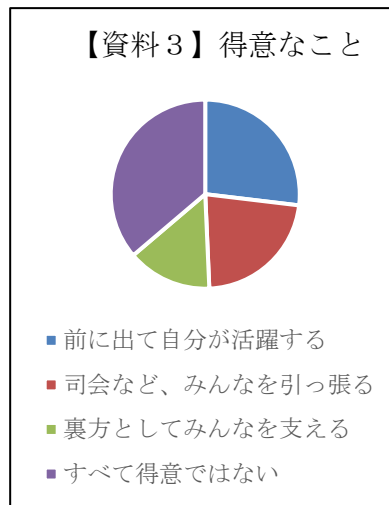
【資料2】 KITA プロダクションの改善点、要望（教員の反省）

- ・入学・卒業を祝う会の担当には、寸劇をしたい生徒を募集しておく必要があった。
- ・一人一活動はとてもよいと思いますが、名前だけのものになっているものは検討する必要があると思います。
- ・3年生の応援合戦は負担が大きく、人数を増やせるとよいと思いました。
- ・自主的に動く生徒が少なくなっている今、全員役割があるのは生徒にとって、とてもよいことだと思います。

これらの意見をもとに、生徒会役員と、内容や人数について検討することとした。

②生徒の実態をつかみ、必要な KITA プロダクションを精選する

昨年度、生徒会活動の一環で、『好きなもの、得意なことをみんなに伝えよう』という活動を行った。その中で全校生徒へアンケートをとり、生徒会役員とともに今年度の KITA プロダクションの精選や人数の確認を行った。【資料3】にあるように、全校生徒の約半数が「前に出て活躍したい」と



考えており、司会や行事運営の人数を増やすこととした。また、【資料4】にあるように、装飾や看板、力仕事で自分の得意を生かせる生徒も多いことが分かった。

これらを踏まえ、“自分の得意なことを生かせる活動”をコンセプトに、新1年生も含め、活動内容をきちんと把握し、KITA プロダクションの仕事を決められるよう、【司会・運営】、【看板・装飾】、【その他】の大きく3つに分類した。

(2) KITA プロダクション年間計画 (令和6年度)

仕事内容	活動内容詳細	実施時期	行事名	KITA プロ人数 (各クラス)		
				3年	2年	1年
【司会】 【運営】	・司会進行 ・アナウンス ・寸劇 ・舞台 ・スライド制作 ・情報機器操作	5月	入学を祝う会	3	3	×
		6月	生徒会レク	1	1	1
		9月	SF 生徒会企画	6	1	1
		11月	北中祭運営	3	3	3
		3月	卒業を祝う会	×	4	4
【看板】 【装飾】	・旗制作 ・看板制作		ウェルカムボード	4	4	4
		9月	学級旗	6	6	7
		11月	シンボルウォール	2	2	2
【その他】	・選挙管理委員	11月	後期生徒会役員選挙	2	2	2
		3月	前期生徒会役員選挙	×	2	2
	・器具準備 ・テント設営	9月	SF 器具係	2	2	2
		9月	SF テント係	6	6	6

(3) 生徒が自分の得意なことを生かし、生徒会活動を行うことで、自他の価値やよさを認め合い、自己有用感を育むことができる。(仮説2の実践)

①得意分野を生かして『入学を祝う会』の運営を行う(【司会・運営】生徒の活躍)

行事の運営を行う上で、昨年度までは適切な人数を割り振ることでスムーズな運営に務めてきたが、生徒会役員と掲げた“自分の得意なことを生かせる活動”をもとに、今年度は【典礼・司会】【ナレーション】【スライド操作・情報機器操作】【寸劇】【1年生クイズ係】の5つの仕事を、人数比関係なく本人の希望をもとに仕事の割り振りを行った。人数が足りない部分は教師や生徒会役員で補うことで、KITA プロダクションの生徒が自分の得意分野を生かせるよう工夫した。

〈入学を祝う会準備の様子(一部抜粋)〉

司会：ここで司会の言葉入れないと1年生動けくない？

役員：いいよ。司会いい～？1年生クイズ始めるとき！

司会：言ってあげた方がいいよね。じゃあ入れとくね。

機器操作：司会マイク使ってるの青？赤？

役員：待って、確認する。

ナレ：ナレーションは赤だよ！ずっとこれ使う。

役員：今緑どこにある？寸劇マイク何本ほしい？

寸劇：2本あると嬉しい！先生役と生徒役で。

機器操作：じゃあ色決めていい？赤ナレーションで、典礼が青にしよ。寸劇は緑と黄色使って！



上記のように、生徒が自分の仕事を行う上で気付いたことは意見を反映することができるよう、生徒会役員がとりまとめとなって動いた。自分の長所を生かすことができるからこそ、自主的に動く生徒の姿を見ることができた。

また、行事後の1年生の感想(毎日の日記より一部抜粋)をKITA プロダクション生徒に共有することで、生徒の活動の価値付けを行った。

1年生の感想(毎日の日記より一部抜粋)

- ・先輩たちがぼくたちのためにやってくれた寸劇が、本当に楽しかった。
- ・クイズで北中のことをたくさん知れて、おもしろいクイズもあって、先輩たちはすごいなと思った。答えるときにペンがつかなかったのを先輩がすぐ変えてくれた。
- ・僕たちのために盛り上げてくれる先輩がかっこよかった。

KITA プロダクション生徒の振り返り

- ・1年生が楽しんでくれて、たくさん笑顔が見れてやってよかった。来年もまた寸劇をやりたいと思った。【寸劇】
- ・マイクも音楽もミスなくやれてよかった。自分は情報機器の操作が得意だからやれて活躍できてよかった。【情報機器操作】
- ・クイズで1年生が楽しんでくれたから嬉しかった。【1年生クイズ係】

②得意分野を生かして『ウェルカムボード』の作成を行う（【看板・装飾】生徒の活躍）

北中学校の正門を飾る看板、ウェルカムボード。縦1.3m、横5.1mにもなるテント生地
の看板は、行事ごとに作成した生徒の作品で彩られている。

昨年度より、2年生が市長杯のとき（7月）、1年生が体育大会のとき（9月）、3年生が文
化祭のとき（11月）、と分けて制作を行っている。今年度も同様に分担した。ここでは現在
掲示してある2年生のウェルカムボードの制作過程について言及する。

まず、看板に入れる言葉や絵を考える必要がある。1、2年生から募集した「3年生に向
けた最後の大会（運動部）へのエール」をもとに、2年生学級代表が中心となって言葉を決
めた。今年度は「全力出し切れ 北中魂 輝く笑顔のその先へ」となった。

言葉が決まってからが、KITA プロダクションの出番となる。

〈デザイン案検討の話し合い（一部抜粋）〉

生徒A：まず絵がいるかどうかだね。どう？

生徒B：入れるならそれぞれの部活の絵？

生徒C：でもそうすると言葉が薄れるよね。

生徒A：じゃあ絵なしでいく？絵苦手なんだよね。

生徒D：言葉だけの去年の先輩のやつかっこよかったよね。

生徒A：まずそこから決めようよ。多数決でいい？絵入れたい人？文字だけの人？

生徒A：じゃあ文字だけでいこう。でもそれこそ文字凝りたい！迫力ある字がいいよね。

生徒D：美術でやったの・・・なんだっけ。

教師：パソコンで打ってみればいろいろできるよ。これ押して。

生徒D：これこれ！で、太くなるともっと迫力出るんじゃない？

生徒E：これ縁取りもあるといいよ。看板遠くから見ると。

生徒A：字の色は？迫力ある色って何～？



上記のように、ただの色塗りに終わらず、自分たちの
納得いく作品を制作するための手立てとして、文字のフ
ォントや色、また、絵を使用するかどうかまで、すべて
自分たちで決めた。また、活動についても【背景、下書
き】【文字色塗り】【文字縁取り】の3つの部隊から選ぶ
ことで、自分の得意なことを最大限生かせる環境で活躍
できるようにした。同じように装飾や看板を希望した生
徒であっても、得意不得意はそれぞれ違う。細かい作業
が得意な生徒もいれば、大胆に書くことで素早く仕上げ
ることが得意な生徒もいる。それぞれが、適材適所で活
躍できる場を提供した。



KITA プロダクション生徒の振り返り

- ・背景すごく早く塗れた。下書きはもっと太くできるとよかったかも。【背景・下書き】
- ・友達が習字の筆みたいに使うといいって言って、本当に迫力ある字ができた。【文字色塗り】
- ・細かいから緊張したけど、丁寧にできたと思う。文字の子たちがすごく上手に塗ってくれて塗りやすくしてくれたしすごいなと思った。【文字縁取り】
- ・飾ってみると、自分たちの作品があるからやっぱりうれしい。

5. 成果と課題

(1) 成果

(仮説1) 学校活動としての委員会や係活動に加え、行事ごとの実行委員を全員に任せることで、自分の役割を認識し、生徒一人ひとりが活躍する場を見つけることができる。

仮説1より、KITA プロダクションの活動の見直しにより、生徒にとってそれぞれの長所や特性をもとに自分の得意なことを生かせる場としての活動機会を増やすことができたと考えられる。4ページ目の生徒の反省「マイクも音楽もミスなくやれてよかった。自分は情報機器の操作が得意だからやれて活躍できてよかった。」とあるように、生徒会役員と掲げた“自分の得意なことを生かせる活動”を実現する場として、自分らしさを生かし、集団の中で主体的に考え、動こうとする生徒の姿が見てとれた。

(仮説2) 生徒が自分の得意なことを生かし、生徒会活動を行うことで、自他の価値やよさを認め合い、自己有用感を育むことができる。

仮説2より、それぞれが適材適所で活躍できる場をこちらが提供したり、生徒自身に選ばせたりすることで、6ページ目の生徒の反省「細かいから緊張したけど、丁寧にできたと思う。文字の子たちがすごく上手に塗ってくれて塗りやすくしてくれたしすごいなと思った。」とあるように、自身だけではなく他者のよさも素直に認め、さらに反省の共有により生徒の達成感や自己有用感につなげることができたと考えられる。

(2) 課題

今年度の KITA プロダクションの活動はまだ始めたばかりで、2学期には大きな行事も控えている。4月の時点で KITA プロダクションを決める関係で、生徒によっては得意なことが変化することもあるかと思われる。また、新しく挑戦するからこそ見つけられる自分の長所があることも確かだ。今後、本当の意味で主体的・協働的に活動を行うためにも、生徒それぞれの達成感や成功体験を得る機会を増やしていく必要があると感じた。

6. おわりに

昨年度末、KITA プロダクションの活動を見直したきっかけは、一人の卒業生の言葉だ。「文化祭のアナウンスをすごく褒められてから、ずっと悩んでいました。私、来年声優の学校に入学します。」中学生時代は将来の夢に悩んでいたこの生徒。アナウンス係で褒められた経験をもとに、高等学校では放送部に所属し、自分の夢もつかんだ。生徒にとって、学校でのさまざまな体験活動がいかに大切であるか、また、いかに価値のあるものか、考えさせられるよい機会となった。